

Tobayama Cave, the Funeral Cave during the Kofun Period

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/47112

古墳時代の洞窟葬所、鳥羽山洞窟

櫻井 秀雄

(長野県埋蔵文化財センター)

1 はじめに

長野県上田市の国史跡、鳥羽山洞窟は、古墳時代において洞窟を葬所とした遺跡である。洞窟内から人骨が「曝葬」状態で出土した昭和41年の最初の発掘調査からすでに50年が経過した。発見当時から、全国的にも珍しい墳丘(マウンド)をもたない古墳時代の洞窟内葬所として、また傑出した出土品を有する遺跡として注目を集めてきたことは周知のとおりである。その間、平成12年には本報告書が刊行され、遺跡の全容が公表されるに至った(関・永峯2000。以下、報告書と記載)。また、出土品については、二重ハソウや鳴鏑などの集成がなされる中で、その稀少価値がよりクローズアップされてきている(光江2014、杉山2015)。

私も上田市立信濃国分寺資料館の市民講座で、平成24年及び28年の2回にわたり、鳥羽山洞窟について私見を述べる機会を得た。¹⁾

今回は、この古墳以外の特異な墓制をもつ鳥羽山洞窟の洞窟葬所について、私なりの考察を行うものである。

2 発見から調査、国史跡指定へ

上田市丸子地区の腰越地籍に鳥羽山洞窟はある。丸子地区(旧丸子町)は武石地区(旧武石村)及び長和町とともに依田窪地域と呼ばれる。鳥羽山は霧ヶ峰を源流とする依田川の東側に位置するが、依田川と武石川が合流する、名勝地「飛魚」にほど近い右岸の断崖に形成された洞窟状の岩陰が遺跡である。この洞窟は、依田川河床からは約15mの高さにある。

その発見は昭和41年の春のことであった。丸子実業高校(現丸子修学館高校)教諭の関孝一氏(後に長野県教委文化課埋蔵文化財係長、長野県埋蔵文化財センター中野事務所長、長野県立歴史館学芸部長を歴任)は、顧問を務める地歴部の生徒とともに依田川に面した鳥羽山の断崖を踏査していた。当時、最古の縄文土

器を目指して長野県内でも洞窟調査の気運が高まっており、須坂市石小屋洞窟や旧真田町(現上田市)唐沢岩陰遺跡、佐久市芦内洞窟などの調査が積極的に行われていた。関氏と丸子実業高校地歴部の生徒たちも縄文時代の洞窟遺跡を探するため、依田川流域の鳥羽山西麓の洞窟や岩陰の踏査に挑んでいたのである。鳥羽山洞窟は最後にはいった洞窟であったという。「アレッ、土器だ」。洞窟の奥にいた一人の生徒が叫んだ。みれば、足元に苔むした土器片が埋もれないまま散乱しているではないか。戸惑いを覚えながら夢中で土器片を集めたが、これが後に古墳時代の途方もない葬所跡となって全貌をあらわそうとは、誰一人思ってもみなかった。」関氏が報告書で回想する発見の瞬間であった。

発掘調査は、昭和41年から43年までの3ケ年にわたり、夏休みを利用して実施された。縄文時代の敷石住居跡なども確認されたが、主体は全国的にも珍しい古墳以外の墓制をもつ洞窟を利用した古墳時代中期の葬所であることが判明したのである。

遺跡は、昭和47年には長野県史跡に、そして昭和53年には国史跡へ指定され、保護が図られている。出土品についても平成19年に247点が長野県宝に指定されており、上田市立丸子郷土博物館で収蔵・展示されている。

3 洞窟を葬所とした希有な墓制

さて、ここで遺跡の概要を報告書に基づいてまとめてみたい。

鳥羽山洞窟は、前述のとおり、依田川に面した鳥羽山の断崖に西を向いて開口した洞窟である。幅25m、奥行きは最深部で15mをはかる。洞窟の基盤は底線下のテラスと最奥部との間には約4mの比高差があり、この傾斜面に河原石を石段状に4段にわたり築いて、石敷をした5面(I面～V面)の平坦部を作り、葬所の施設としていたのである。

この5面の平坦部から人骨が他の遺物とともに出土

しており、それぞれが葬所とされていたことがわかる。

人骨は多数出土したが、遺存状態が概して悪く、どのくらいの数の遺骸がこの葬所に置かれていたのかは不明である。

人骨には焼かれていないものと強い火力を受けて焼け小片化したものと大別される。これら多数の人骨の出土状況から調査担当者の関孝一氏と永峯光一氏は、遺骸をそのまま伸展位で曝した状態のものを「曝葬」と名付け、これが鳥羽山洞窟最大の特徴であることを見出した。さらに人骨はこうした曝葬の他にも、長骨を束ねた状態の「集骨葬」、頭骨などを焼いた状態の「焼骨葬」、焼骨を散布した状態の「散布骨葬」と様々なものがみられた。

最奥部のⅠ面及びⅡ面では、曝葬状態の人骨が累々と重なるように置かれていた。報告書によればⅠ面では「Ⅱ面と同じく、果たして骨化していたのかどうかかわからない前の屍体をそのままに、次から次へと屍体を重ねていったようである。伸展位で葬るというよりも、岩壁の隙間に屍体をつめ込んだといった」状態であったという。Ⅲ面では曝葬骨と焼骨のブロックが入り乱れた状態で確認された。Ⅳ面では、一時的な焚火が行われ、その後と同じ場所で曝葬ないしは集骨葬と多量の土師器を用いる儀礼がおこなわれたのではない



写真1 鳥羽山洞窟（筆者撮影）

かと指摘している。この面では焼骨群もみられている。Ⅴ面には、焼土や灰層とともに焼けた人骨が石敷一面に散乱した状態のもの他、焼けていない人骨も検出されている。

このように鳥羽山洞窟は、墳丘（マウンド）を持つ古墳ではない、5世紀中頃の洞窟を葬所とした遺跡という古墳時代では稀有な墓制である。しかも棺の痕跡がみられないため、遺骸は「曝葬」されたものであることがわかる遺跡である。

他の出土遺物についてみると、Ⅰ面の最奥部からは、倒立した埴・壺・高坏などの土師器を方形に配置させ



図1 鳥羽山洞窟の石敷遺構（報告書より）

た状態で発見されている。これらの土師器は鳥羽山洞窟のなかで最も古層を示したものである。Ⅱ面からの出土遺物は土師器片がわずかに出土したのみである。Ⅲ面からは、はそうや甕などの初期須恵器が集中する。Ⅳ面の出土遺物では鉄剣をはじめ、多量の土師器、刀子、鹿角製紡錘車、銅釧などが出土した。Ⅴ面から出土した遺物は多く、30 個体を越す土師器や石釧、琴柱形石製品、鹿角製紡錘車、鹿角製刀子、多量の滑石製玉類、ガラス小玉、鉄剣、鉄鏃、きさげ、轡、鉞、鉄鎌、鉄斧、鹿角製鳴鏑、二重ハソウなど多種多様なものがみられている。

4 鳥羽山洞窟の出土品

鳥羽山洞窟から出土した古墳時代の遺物には、土器（土師器、須恵器）、金属製品、石製品、鹿角製品、玉類などがある。

(1) 土器

土師器は 100 個体以上が出土している（図 2- 1 ～ 12）。5 世紀第 2 四半期から第 3 四半期に比定されるものである。器種には、壺、長頸埴、埴、ハソウ、高坏、小形平底埴、碗、坏、小型甕、鉢などがある。甕・甌という煮沸器はみられないのは、葬所であるためであろう。

須恵器は、二重ハソウ、把手付碗、甕、ハソウなどが出土している（図 2-13 ～ 17）。須恵器が長野県内でも最も早い時期に移入された遺跡のひとつである。西山克己氏は、県内の初期須恵器は、拠点地域に持ち込まれ、その拠点地域における中核的存在であった中小在地豪族層の所有となったと指摘し、鳥羽山洞窟から出土した小型ハソウ・大型壺は ON46 型式から TK208 型式に属すると考えられるとする。そして国内の窯や朝鮮半島からの出土のない二重ハソウ（図 2-14）と国内窯でみられる棒状の把手ではなく板状の把手を有する把手付碗（図 2-13）については、「ともに器面は黒灰色を呈し光沢をおび胎土はともに鉄色に焼きしまったものであり、国内産のものとするよりは舶載品と考えた方がよさそうな土器である」と論じている（西山 2013）。

一方、光江章氏は、二重ハソウは日本独自の器種である可能性が強いと指摘する。光江氏の集成によれば、二重ハソウは全国で 60 点を数え、県内では鳥羽山洞窟の他、中野市の金鑑山古墳から 2 点と千曲市の森 2 号墳から 1 点の計 4 点が出土している。光江氏は二重ハソウについて、①出土地は宮城県から長崎県にかけて分布しているが、畿内及びその周辺（兵庫県・三重県・和歌山県）で 33 例（55%）が出土し、西日本全

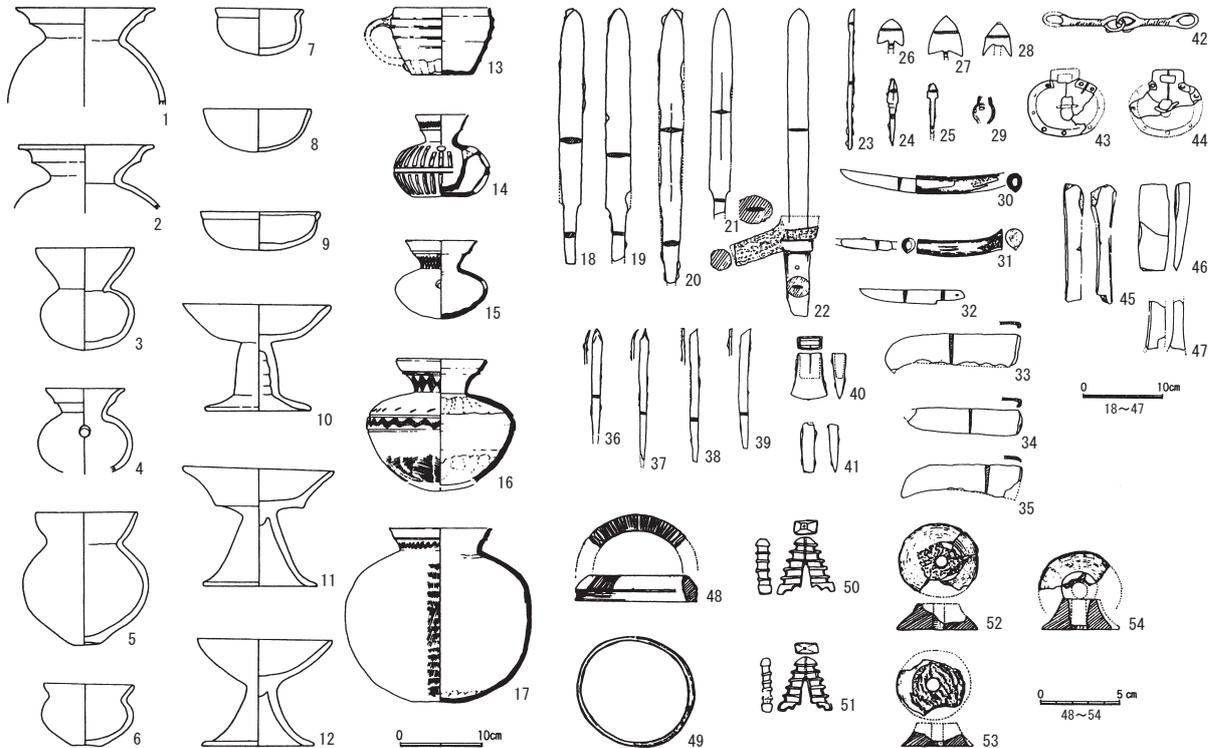


図 2 鳥羽山洞窟の主な出土品（櫻井 2012 より）

体で43例(72%)を占めるに対して、東日本からの出土は16例(27%)であること。②時期的には、須恵器生産の初期段階から5世紀前半までの一群と6世紀の一群に分かれること。③古墳からの出土が全体の27%を占めるが、出土古墳は各地域の首長墓ではなく、小規模な古墳であること。④生産は大阪府の陶邑窯址群操業の初期段階から行われ、各地域に供給されて中小首長の葬送に用いられたものであること。⑤渡来系遺物との共伴例が多く認められ、韓半島からの渡来系氏族との関係が深く、これらの氏族により供給され、使用された可能性が高いこと。⑥壺形ハソウに鈴としての用途を付加し、ハソウ本来の液体の注器としての機能を失うことなく、鈴としての機能を併せ持ったものであること。を指摘する。また、鳥羽山洞窟の把手付塚については陶質土器として理解し、出土品には在地系と渡来系の遺物が混在していると述べている(光江2014)。

二重ハソウと把手付塚については、渡来系技術の色合いが強い遺物であることは間違いなく、舶載品の可能性も高いものであるといえよう。そしてそこには、中小豪族層という所有者像も見えてきそうである。

(2) 金属製品

金属製品には、鉄製品と銅製品が出土している。鉄製品は鉄剣(図2-18～22)、鉄鎌(図2-23～25)、などの武具と馬具の轡(図2-42～44)や刀子(図2-30～32)、鎌、斧、鉞、きさげ、たがねなどの工具(図1-33～41)と豊富である。銅製品は銅釧(図2-49)である。鉄剣には、短剣、長剣があり、なかには曲げられた鉄剣や鹿角装鉄剣もみられる。曲げられた鉄剣については、報告書で関孝一氏は、5世紀前半に出現したもので、朝鮮半島南部(伽耶地方など)に類例があることを指摘し、本来の機能を破損し、葬送儀礼のためのものとして用いたのではないかと推測する。鳥羽山洞窟出土品も5世紀前半の製作ととらえ、「鳥羽山の集団が騎乗の風を持ち、永年使用した後に、曝葬地へ献供したもの」と考えられるのではないかとする。馬具は轡(鏡板と銜)が出土している。この轡を中国遼寧省の王子墳9001号墓出土品の類品とみて、鮮卑との関連性を説く桃崎祐輔氏の論もある(関・永峯2000)。このように渡来系の色合いが強い稀少なものも少なくない。銅釧は完形品である。

(3) 石製品

石製品には古墳からの出土が多い琴柱形石製品(図2-50・51)や石釧(図2-48)がみられる。琴柱形石製品の長野県内での発見例は県内最大の森將軍塚古墳に次ぐ大きさの前方後円墳の長野市川柳將軍塚古墳出土のものをみるにすぎない。

石釧も長野県内では本例も含めて5遺跡6地点13点しかみられない稀少品である(櫻井2011)。

(4) 鹿角製品

鹿角製品では紡錘車(図2-52・53)や鎌の下に付けて音を出す鳴鐘(図2-29)があり、鳴鐘は古墳時代では全国で9遺跡19点の出土が確認されるにすぎない(杉山2015)。杉山氏は鉄鎌に伴う鹿角製装具とともに鳴鐘について、鳥羽山洞窟出土品も含めて検討し、5世紀に入って出現すること、5世紀から6世紀にかけては、朝鮮半島系遺物の共伴例が多く、朝鮮半島との関わりが想定される古墳や遺跡から出土する例が多いこと、地域的・時期的・数量的に限定されている特殊なものであることなどを指摘する。そして鳴鐘は、北東アジアを起源にして、朝鮮半島を経由して渡来人が関わって日本に伝えられたものであると想定している。

長野県内では唯一の出土である。

(5) 玉類

玉類は、滑石製勾玉・管玉・白玉・ガラス小玉、砥石などが出土している。なお、滑石製勾玉には祭具である石製模造品も含まれているため、この葬所では何らかの祭祀儀礼も行ったことがうかがえる。

このように鳥羽山洞窟からの出土品は、質量ともに古墳副葬品と比べてもなんなら遜色はない、というよりもこれほどの副葬品を有する古墳は長野県内ではそうそう見当たらない。舶載品の可能性が指摘されるものをはじめ、豪華でしかも稀少価値の高い第一級品の遺物ばかりである。鳥羽山洞窟に葬られた集団は、相当な力を有していたことがわかる。

なお、報告書で関氏は、これらの出土品のうち、副葬品として扱うことができるのは、I面で出土した鹿角装剣程度であり、洞窟庇線に近いところでみつかった轡・鳴鐘・きさげ・斧・鎌・鹿角装刀子・玉類などは「葬送そのものよりも、むしろその後行われたであろう献供儀礼に用いられた蓋然性が強い」のではないかと推測している。後述する殯に伴ったものと考え

こともできるのではなかろうか。

5 鳥羽山洞窟での遺骸の扱い方

～殯との関係～

鳥羽山洞窟の最大の特徴は、古墳以外の墓制である洞窟葬所において、「曝葬」をはじめとして「集骨葬」、「焼骨葬」、「散布骨葬」と多様な遺骸の扱い方がみられたことである。この独特な葬法をどうみるかが、鳥羽山洞窟を理解する最重要ポイントである。

私は、「曝葬」がこの洞窟葬所での基本であると考えている。報告書に記載される出土状況によれば、「曝葬状態の人骨が累々と重なるように置かれて」いたり、「前の屍体をそのままに、次から次へと屍体を重ねていったよう」な状態であったことが知られる。棺に入れられたとは考え難い出土状況である。このことから遺体を埋めないで曝葬し、骨化したのちに、「集骨」や「焼骨」、「散布骨」といった方法で複数回にわたって骨を故意に扱っていることが理解できよう。こうした骨を「いじる」行為は、縄文時代後期から弥生時代前期までに盛行する「再葬墓」と結びつけて考える向きもあるが、私は田中良之氏の「死霊再生阻止の儀礼」という視点からみるべきであると考えている。田中氏は、大分県上ノ原四八号横穴のように埋葬後、遺骸が骨になったところで、もう一度閉塞部を開け人骨の特に脚部を意図的に動かす事例があることを指摘し、「遺体の脚部をいじるのは、死者が現世へと追いかけてこないために脚力を失わせる」行為であり、いわば「死霊再生阻止の儀礼」ではないかと論ずる。そして同様に縄文時代から古墳時代に続く死者の再生を阻止するための儀礼行為である「遺体毀損」の存在も指摘している（田中良 2008）。鳥羽山洞窟での人骨のありかたもこうした儀礼と同様に理解するべきものであり、「再葬」とは異なるものと私もみたい。「再葬」については古墳時代まで続くとみる論者もいるが、設楽博巳氏の「弥生中期中葉に衰退した弥生再葬墓が古墳時代の葬法に影響を与えるほど長期にわたって継続したとは思えないし、再葬自体は継続していたとしても、古墳時代前期の再葬は弥生再葬と性格を異にするようになったと考えなくてはならない。」という指摘（設楽 2008）が正鵠を射たものと私は考える。

そして、こうした死霊再生阻止のための「遺体をいじる」行為は、殯と大きく関係するものであると私は

考えている。

殯とは、「人の死後、埋葬するまでの間、遺体を小屋内に安置したり、さらには仮埋葬しておき、その期間中、遺族や近親者が小屋に籠って諸儀礼を尽くして奉仕する、我が国古代において普遍的に行われた葬制」であり（和田 1995）、『魏志倭人伝』に「始め死するや停喪十余日、時に至りて肉を食わず、喪主哭泣し、他人就いて歌舞飲酒す」とあるように、弥生時代の邪馬台国の時代に殯が行われていたことがわかる。『隋書倭国伝』にも「貴人は三年外に殯し、庶人は日をトして瘞む」とあり、7世紀初頭段階でもその存在がみられる。また、『古事記』の天若日子の葬送の神話に「作喪屋殯之」とあるようにその小屋は「喪屋」と呼ばれていたようである。

この殯については、死者の再生を祈るための儀礼と見方が一般的であるが、私は五来重氏が論じるように、死者の怨霊を封じ込め、浄化させる儀礼の一環とみるべきだと考えている。五来氏は、死んで間もない靈魂は「荒魂（新魂）」と呼ばれる、恐ろしい災害のものとなる祟りの様相を示しているものであり、死者の靈魂はすべてが怨霊であると指摘する。そのためにこれを封鎖することが葬送儀礼の基本となるが、その封鎖呪術にあたるものが殯であるというのである。そして、殯の期間は穢れた肉体が消えて浄化される期間であるとみる（五来 1994）。

また、穂積裕昌氏は、奈良県南郷大東遺跡などでみられる木樋等による導水施設について、厳重な遮蔽施設とその内部に覆屋を有する隔絶性の高い単独施設であることなどを根拠に、神まつりのための祭祀施設ではなく、死者を安置して処理する殯所であると指摘している。そして、殯は内部の空間で鎮魂の儀礼を行いつつ、悪霊や凶癘魂を護ることが目的であり、殯を行った導水施設では、流水によって遺体の潰えを洗浄したり、洗骨するなどの遺体処理とそれに伴う死者に対する儀礼・所作を担ったと論じている（穂積 2012）。このように殯とは、死者の靈魂を浄化し、鎮魂する葬送儀礼であると理解すべきものである。

田中良之氏は、愛媛県松山市葉佐池古墳 1 号石室 B 号人骨においては、死後すぐの死体に産卵するハエと腐肉に産卵するハエという二種類の囲蛹殻が付着していたことから死亡した後少なくとも腐臭を放ち始めるまでの数日間は埋葬されるずに殯が行われていたこと

を、また宮崎県えびの市島内 69 号地下式横穴墓出土人骨の骨盤外から検出された大便の存在から、これは死後の遺体腐敗ガスによって噴出されたものとみて、体内に腐敗ガスが充満する膨満期以前（1～2週間程度の期間）に数日間の殯を経て埋葬されていたことを読み取っている（田中良 2012）。

私は、鳥羽山洞窟での「曝葬」は洞窟内で殯を行っていた状態をあらわすものだと理解したい。ただし、鳥羽山洞窟の被葬者は古墳に埋葬されることはなかった。殯を終えた後には、そのまま曝葬の状態でおかれるか、もしくは「集骨」、「焼骨」、「散布骨」という遺骨処理を行ったものと理解するものである。考えてみれば古墳に葬られる人物は、古墳時代においても限られた存在である。古墳埋葬者のみが殯を行ったわけではなく、弥生時代以降において広く殯が行われていたことは、先に触れた『魏志倭人伝』の記述でもわかる。私は、殯こそが古代日本の葬送儀礼の基本であり、古墳に埋葬するかどうかは二次的な問題となると考えるものである。鳥羽山洞窟でみられる「集骨」、「焼骨」、「散布骨」という人骨のありかたは、殯が終了した後の遺骨処理のバリエーションであると私はとらえている。それは先述した田中良之氏の指摘する死霊再生阻止のために「遺体をいじる」という行為のひとつでもあろう。田中氏は、大分県中津市上ノ原横穴群をはじめとして島根県、群馬県での事例も含めて「五世紀後半になると遺体毀損は死後十年前後を経過してから行われるようになり、さらに脚部だけでなく前身の関節を外すようになる」ことを指摘する（田中良 2012）。

ところで、古墳の最大の機能は「霊魂封じ込め」であり、殯もそうした古墳埋葬を含めた葬送儀礼の一環であると私は考えている。²⁾ 殯により霊魂の浄化・鎮魂を行い、古墳に遺骸を密封することにより霊魂を封じ込めるのが葬送儀礼の流れであったともいえよう。

「霊魂封じ込め」ということに関していえば、鳥羽山洞窟にも密封性は強くみられる。鳥羽山洞窟は依田川右岸の断崖にあり、対岸からは洞窟が見渡せるものの、武石川と合流して流れが急となる依田川を渡るとは容易ではない。現在、洞窟に向かうには、北側から鳥羽山を越える方法もあるが、最短コースは依田川の上流にある橋を渡り、川岸の断崖沿いをたどる道程である。昭和前半の一時期には洞窟へ行くための橋が

かかっていた時期もあったようであるが、古墳時代には現在と同様に上流の川幅がやや狭い上流側で対岸を渡ったものと考えるのが自然であろう。

鳥羽山洞窟の現地を踏査すると感じるのは、隔絶された静寂な空間であるということである。洞窟側から対岸の国道 152 号の様子はわかるが、依田川の急峻ということもあり、自動車などの音は聞こえず、対岸とは隔絶された場所であることが実感できる。葬所としての密封性は備えられた空間である。この洞窟を葬所とした大きな理由ではなかろうか。古墳は築造しなかったものの、古墳がもつ密封性の思想は、この洞窟においても認められるのである。

殯や「霊魂封じ込めのための密封性」という弥生時代以来の葬送儀礼の基本は、鳥羽山洞窟でも共通しているわけである。しかしながら、傑出した出土品の数々からすれば、古墳に葬られてもおかしきない勢力をもつ集団であったことは間違いない。なぜ古墳を築造せずに洞窟を葬所にしたのか、ここに鳥羽山洞窟の最大の特徴があるといえよう。

6 もうひとつの洞窟葬所～岩谷堂洞窟～

古墳時代という名のおりに、高く盛り上げた墳丘（マウンド）をもった墳墓造りに邁進した時代のなかで、このように洞窟を葬所にした鳥羽山の洞窟遺跡は全国的にも極めて珍しい存在であるが、同様に洞窟を葬所とする古墳時代の遺跡は、腰越の鳥羽山洞窟から依田川を 3.5 km ほど下った御岳堂の断崖中腹にも存在する。宝蔵寺の裏山の岩壁にある岩谷堂洞窟である。

この洞窟は昭和 4 年頃に発見されたものであり、小山真夫氏により「岩窟古墳」として報告されている（小



写真 2 岩谷堂洞窟（筆者撮影）

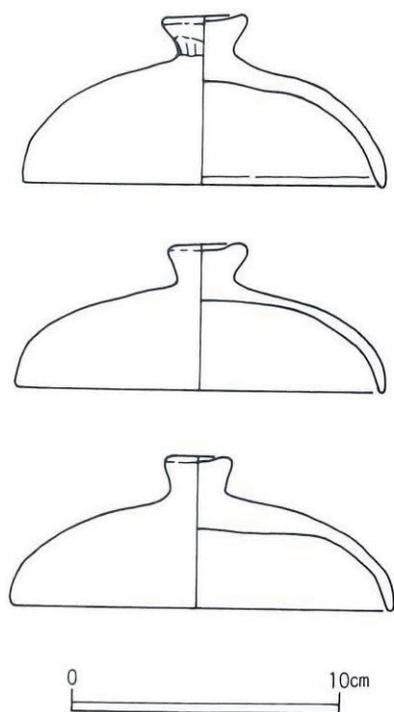


図3 岩谷堂洞窟出土の土師器蓋（報告書より）

山 1932)。昭和 61 年には丸子町誌編纂に伴い確認調査が行われた。洞窟内の比高差は入口部と奥とで約 4 m あり、入り口に向かって傾斜している。洞窟は 2 つにわかれ、本洞窟は幅約 9 m、奥行約 12 m、側洞窟は幅約 1.5 m、奥行き約 10 m をはかる。同口内には石敷等はなく、入口付近で列石、中央部から土坑 4 基が検出された。人骨は焼けた人骨と焼いていない人骨とがみられ、成人の男女、幼児など 5 体以上が出土したという。丸子町誌では、土坑の存在から、遺骸を曝葬ではなく土坑に埋めた後に、骨をとりだして骨焼を行った形跡もみられると述べている。人骨は全体に散乱状態で出土しているため、曝葬や集骨、焼骨、散布骨といった区別はできない状況であったという（丸子町誌刊行会 1992）。遺物は宝蔵寺所蔵品と確認調査により新たに発見されたものがある。出土品には土師器（高坏・坏・ハソウ・蓋など）、須恵器（大甕・坏・ハソウ・長頸壺）、直刀、鉄鏃、石製品（紡錘車・刀子形石製模造品）、玉類（勾玉、管玉、白玉、ガラス小玉）、小形乳文鏡などがみられる。坏蓋とハソウなど 5 世紀中葉の遺物もみられるが、6 世紀前半頃の遺物が主体となっている。鳥羽山洞窟の後嗣となる洞窟葬所として理解できよう。内弯した坏状の本体に頂部が凹んだ

つまみを有する土師器蓋は 5 世紀後半に位置付けられるが、報告書によれば、類例は岩谷堂洞窟の 3 点を含めて県内で 6 点（千曲市城の内遺跡、長野市本村東沖遺跡、石川条里遺跡併下地点）のみの出土であるといい、善光寺平南部と依田窪地域に限られていることを重視している。また、『丸子町誌』では、この坏蓋のつまみが特異な作りであり、朝鮮半島に類例が求められるのではないかと指摘している。

このように洞窟葬所が依田川流域の依田窪地域には 2 か所で確認されていることは、その被葬者像を考えていく上で重要な手がかりになると思われる。

7 古墳を造らない集団の謎～被葬者の性格～

それでは、この鳥羽山洞窟及び岩谷堂洞窟を葬所としたのは一体どのような集団であったのであろうか。これについては「在地集団」説と「外来集団」説という 2 つの説が唱えられている。

在地集団説は、洞窟を葬所にする事例が縄文時代からみられること、また再葬も縄文時代後期から弥生時代前半に盛行する葬法であることを重視し、在地集団により縄文時代以降の伝統的な葬法が伝承されていたと理解する立場である。調査担当者のひとりであった永峯光一氏は、こうした再葬墓とのつながりを重視し、在地集団説をとっているが、私は、第 5 章でも論じたとおり、あえて弥生時代の再葬墓と結びつけなくてもよいのではないと考えている。

一方の外来集団説は、洞窟内に「曝葬」という独自の葬法をもった外来集団がこの地にやってきたと理解する立場である。調査担当者の関孝一氏はこの立場をとっている。先述したとおり、私は「曝葬」を殯儀礼のなかで理解すべきであると考えているため、「曝葬」という葬法を外来集団によるものとの見方はとらない。しかしながら、鳥羽山洞窟を含む依田窪地域においては外来集団の移入をうかがわせる以下の 4 点が指摘できることはたしかである。

(1) 弥生時代の稀少な金属製品の存在

鳥羽山洞窟や岩谷堂洞窟のある依田窪地域には弥生時代の遺跡がきわめて少なく、今まで発掘調査された集落跡もごく小規模なものにすぎない。稲作農耕による開発があまり進んでいなかった地域といえるだろう。古墳時代に入っても後述する玉作遺跡がみられる程度である。

このような歴史的環境にある依田窪地域において、鳥羽山洞窟でみられる豪華な出土品を保持できるほど有力な集団が、稲作農耕を基盤とした在地集団から生まれてきたとは考えにくいのである。

しかしながら、一方ではこうした依田窪及びその周辺に、弥生時代の稀少な金属製品が存在していることもまた事実である。

武石地区の上平遺跡からは昭和2年に巴形銅器が発見されている(図4-2)。巴形銅器は日本独自の青銅器であり、盾に付けた装飾品といわれる。全国で36点の出土を数えるがそのうちの26点が九州からであり、東日本では上平遺跡の他には群馬県で1点が出土しているにすぎない(田尻2009)。また、上田原の上田原遺跡では弥生時代の銅鏃と鉄鏃が出土している(図4-1・3)。鉄鏃も九州地方を除くとほとんど出土例がないものであり、ここでもやはり九州との関係が注目される。依田窪地域をはじめとする上田地方は、弥生時代から九州を中心とした広い範囲での交流があったことがうかがえよう。そこにこの地域の特徴があるのかもしれない。なお、上平遺跡は昭和61年に武石村教育委員会が範囲確認調査を行い、弥生時代後期及び古墳時代前期の堅穴住居跡2軒が検出された(武石村誌刊行会1989)。遺跡の規模は把握できなかったが、大規模集落の可能性は低いとみられる。しかしながら『武石村誌』では「弥生時代的生産の立地のしにくい依田窪の地」にある上平へ巴形銅器が運ばれて

きたのには「上平遺跡の弥生ムラは何かしら重要な歴史背景を秘めているように思われる」と指摘しているように、巴形銅器を保持する上平遺跡の存在は、「交通の要所」である依田窪地域の特徴が、弥生時代から認められていることを物語っているとといえるのではなかろうか。

(2) 古墳時代前期の玉作遺跡の存在

古墳時代になるとこの地に突如、玉作り遺跡が出現する。長和町の中道遺跡と御岳堂地籍の社軍神遺跡である。中道遺跡では4世紀前半、社軍神遺跡では4世紀後半のことであった。社軍神遺跡では管玉などの玉類や石釧、鏃形品などの石製品を製作していた(図3)。この時期の玉作りは北陸地方が中心であり、また中道遺跡からも社軍神遺跡からも北陸系の土器が出土していることを踏まえると、北陸からの玉作り工人の到来がクローズアップされる。この依田川流域に玉作り遺跡の出現をみることは、材料となる緑色凝灰岩がとれることに加えて、この地がいまだ可能性に富んだ新開地であったことが外来の玉作り集団にとっては好都合であったのかもしれない。これらの玉作り遺跡と鳥羽山洞窟とは時期がやや離れているため、この玉作り集団の葬所と直結するとは考えがたいが、先述した稀少な金属製品がみられる弥生時代以来、外来集団が入りやすい環境にあったことが指摘できるだろう。

(3) 海蝕洞窟を葬所とした遺跡の存在

鳥羽山洞窟に類似する葬法が、弥生時代から古墳時代の海岸の海蝕洞窟に多くみられることは遺跡の発見当時から指摘されている。

海蝕洞窟を葬所とする遺跡の代表的な事例としては、島根県出雲市の猪目洞窟遺跡、福井県越前町の厨1号洞窟遺跡、富山県水見市の大境洞窟遺跡、和歌山県田辺市の磯間岩陰遺跡、神奈川県三浦市の大浦山洞窟遺跡、千葉県館山市の大寺山1号洞窟、宮城県石巻市の五松山洞窟遺跡などがあげられる(図6)。そしてこれらは「海人集団」の葬所とみられている。このなかには、磯間岩陰遺跡のように石室に葬られたものや大寺山1号洞窟のように木棺に遺骸が納められたものなど、鳥羽山洞窟の曝葬とはやや異なるところも一部ではみられるが、こうした類似例の存在は外来集団説の有力な論拠となっている。磯間岩陰遺跡からは鳥羽山洞窟と同じく鹿角製の鳴鏞・紡錘車、鹿角装剣の出土もみられている。

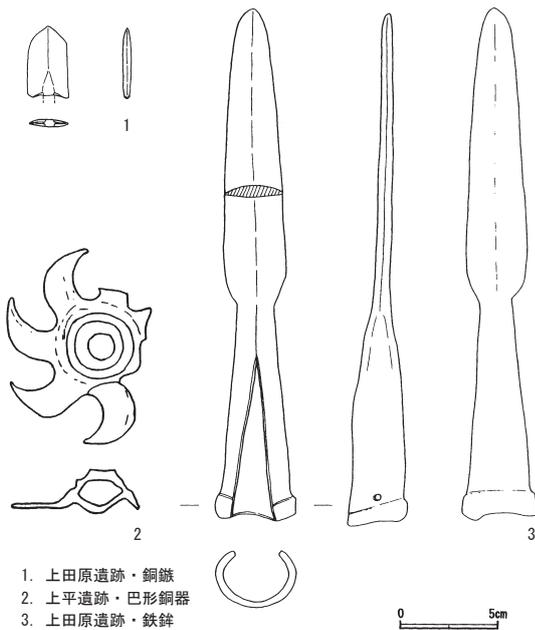
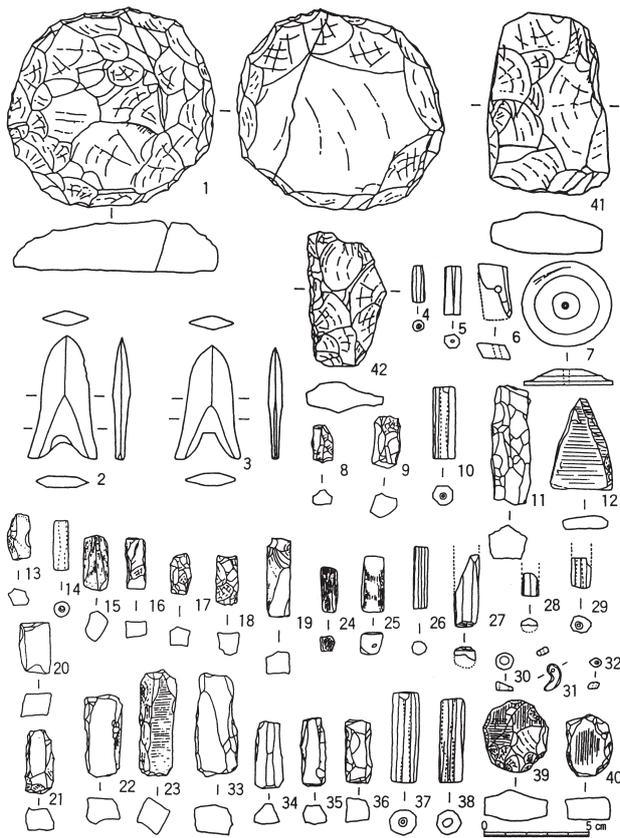


図4 上田地域の稀少な金属製品(櫻井2012より)



(包含層 1～7、4号住 8～12、8号住 13・14、13号住 15・16、21号住 17～32、34号住 33～35、36号住 36・37、45号住 38～42)

図5 社軍神遺跡の石製品・玉類 (塩入 1982 より)

1. 猪目洞窟遺跡 (島根県出雲市)
2. 厨1号洞窟遺跡 (福井県越前町)
3. 大境洞窟遺跡 (富山県氷見市)
4. 磯間岩陰遺跡 (和歌山県田辺市)
5. 大浦山洞窟遺跡 (神奈川県三浦市)

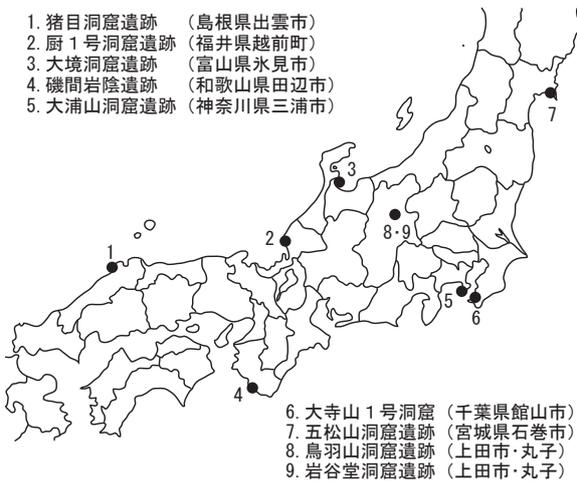


図6 洞窟を葬所とした古墳時代の主な遺跡 (櫻井 2012 より)

橋本達也氏と藤井大祐氏は、こうした洞窟葬所について、「立地からは農耕社会を形成した人々が営んだものとはみなし難く、一般的な古墳時代社会とは異なっていたとみられる」と指摘する。鳥羽山洞窟の歴史的・地理的環境からも首肯できる見解である。

なお、『日本書紀』欽明天皇5年11月状に越国から肅慎が漂着した記事があるが、そのなかに「渴ゑて其の水を飲みて、死ぬる者半に且す。骨、巖岫に積みたり。俗、肅慎隈と呼ぶ」とあり、死んだ者の骨が岩穴に積み重なっていたとある。藤田富士夫氏は、この岩穴は、佐渡の浜端洞穴か夫婦岩洞穴とみられるとし、『日本書紀』成立時には洞窟の埋葬は異世界人の方法として記されており、「海人の独特な世界観の表れである」ことを指摘している(藤田 1990)。奈良時代には洞窟を葬所とすることは、中央政府にとっては好ましくない葬法であったと推測される。

(4) 奈良・平安時代における海部郷の存在

『和名類聚抄』によれば小県郡には、童女郷、山家郷、須波郡、跡部郷、安曾郷、福田郷、海部郷、余戸郷の8郷がある。³⁾ このうち、鳥羽山洞窟、岩谷堂洞窟の所在する依田窪地域は海部郷に推定されている(上田市史編さん委員会 2000)。

『延喜式』及び『和名類聚抄』や平城京・藤原京出土の木簡に記載がある「海部郡」は、尾張国、紀伊国、隠岐国にあり、「海部郷」は小県郡以外にも、上総国市原郡、越前国坂井郡、尾張国海部郡、伊勢国河曲郡、淡路国御原郡(阿満郷)、丹後国熊野郡、隠岐国海部郡、安芸国佐伯郡・安芸郡(阿満郷)、讃岐国山田郡、阿波国那賀郡、土佐国長岡郡、筑前国那阿郡・怡土郡・宗像郡にみられる(藪田 1970)。小県郡を除くと他はすべて海に面した国にある。そのなかで、海のない信濃国小県郡に「海部郡」があることは注目に値する。

藪田香融氏は、海人は単なる「海辺の民」一般を意味するのではなく、大和政権の管掌下におかれた集団が、5世紀以降に部民制が拡充整備されるとともに「海部」と称されるようになり、それを伴造として管掌したのが阿曇連であったことを指摘する(藪田 1970)。

その「海部」の存在は、『和名類聚抄』等において、参河国、若狭国、紀伊国、因幡国、出雲国、隠岐国、吉備国、阿波国で確認できる。その統率者である海部直は、参河国、越前国、紀伊国、播磨国、丹後国、但馬国、因幡国、隠岐国、吉備国、肥前国に、海部臣は出雲国に、海部連は尾張国に、海部公は豊後国にみられる(門脇 2008)。

村井康彦氏は、古代氏族の海部氏について、物部氏、尾張氏、和珥氏、鴨氏と同族であり、いずれも出雲系であることを指摘している。そして、『古事記』にみ

経路の開拓などにより広がっていった可能性が高いと主張している（蒲原 1987）。

また古墳以外の出土も増えているが、集落遺跡から出土するものについては高橋幸治氏が注目される論考を發表している。高橋氏は、奈良県における石釧を含む腕輪形石製品が出土する集落遺跡の立地を分析し、その出土遺跡は下ツ道や山田道などの古道と河川の交差する位置に多くみられ、陸上・水上交通上の要衝に存在することを明らかにしたのである。また、高橋氏はこれらが出土した遺跡は首長居館と評価される遺跡であることも特徴のひとつであると指摘し、集落出土の腕輪形石製品は、首長クラスが入手していたであろうと推測する。さらに「これらの腕輪形石製品の出土した集落が物資の流通にとって結节点的な役割を果たしていた可能性」も論じている（高橋 2003）。

このような蒲原氏や高橋氏の論は、石釧のもつ性格を的確につかんだものであると評価したい。また、私も同一個体とみられる石釧 3 点が竪穴住居跡から出土した小諸市野火附遺跡においては、この周辺が古東山道及び東山道推定ルートと長倉駅推定地が比定される交通の要衝であることから、交易との結びつきを指摘したことがある（櫻井 2011）。

鳥羽山洞窟は葬所であるが、このような性格を持つ石釧が出土していることは、交易にかかわる集団であることの傍証になると考えられよう。

（2）社軍神遺跡で製作された石製品の流通

先述した玉作遺跡である社軍神遺跡からは石釧の未製品（図 5-1）や鏃形品（図 5-2・3・12）などが出土している。このうち注目したいのは鏃形品である。これは鉄鏃や銅鏃を摸した威儀的なものと考えられているが、畿内などの古墳や韓国の金海大成洞 13 号墳からも非常によく似たものが発見されているのである。河村好光氏は、韓国の金海大成洞 13 号墳にも社軍神遺跡で製作したものが運ばれていたとし、「これらの鏃形碧玉製品は、製作地からそのまま渡ったものではなく、複数の矢作集団から特別に集め揃えられた結果と考えるほかはない。鏃形碧玉製品の偏りのない種類構成からみて、特別に調達され組合せをなして届けられた品々とみることができる。」と指摘する（河村 2010）。社軍神遺跡で製作された石製品が広い範囲で流通していたことが知ることができる。そして、河村氏の論ずるようにそれらは大和政権においてとりまとめられ、朝鮮半島へ送られたとみてよいであろう。社軍神遺跡と大和政権との深い関係がうかがえる資料ともなる。

9 交通の要所としての依田窪地域

～交易に携わった集団の葬所か？～

以上のような石製品のありかたからみると、鳥羽山洞窟に葬られた集団は「交易」に深く関わっていたと

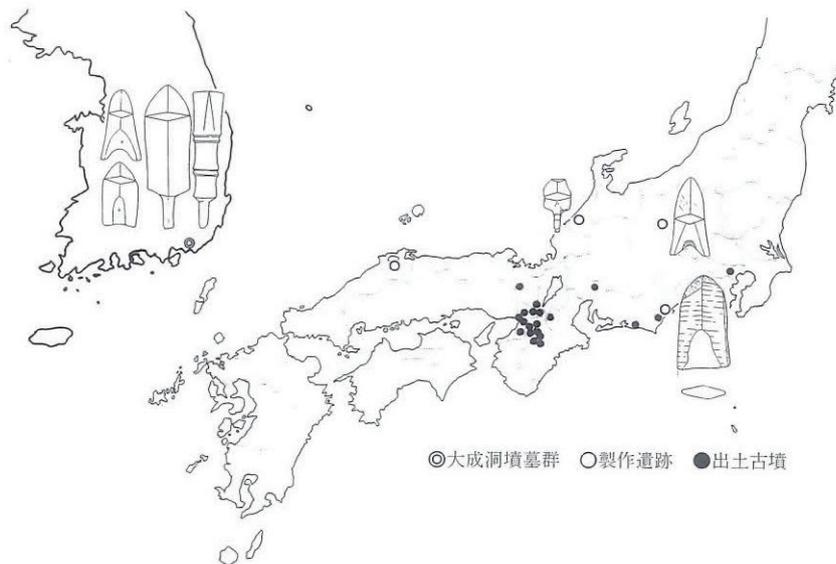


図 8 鏃形石製品の生産地と副葬古墳（河村 2010 より）

想定できるのではなかろうか。

前述したように依田窪地域は弥生時代には巴形銅器の移入があり、古墳時代に入ると玉作り集団が出現するなど外来の文物や外来集団が入りやすい歴史的土壌があった。また地理的にみても、塩田方面や佐久方面はもちろん、大門峠や和田峠を通じての諏訪方面への道、扉峠や三才山峠を通じての松本方面への道が開かれている。多方面と交流が可能な交通の要衝に位置していることが見て取れよう。稲作農耕に適した広大な後背湿地をもたない依田川流域で、優品ぞろいの出土品を持つことができた経済的基盤は「交易」だったと私は考える。

10 古墳以外の墓制と前方後円墳体制

古墳時代は、前方後円墳を頂点として前方後方墳→円墳→方墳という墳形の種類とその規模の大小で大和政権との関係をあらわす「前方後円墳体制」にあったという説が有力である（都出 2011）。これによれば、古墳に葬られなかった人物は、「古墳を造ることができない」程度の政治力・経済力だったと考えるのが自然であろう。ところがこうした理解を大きく変えるのが鳥羽山の洞窟遺跡なのである。洞窟を葬所としたこの集団は、前方後円墳体制には組み入れられていないことは確かである。それでは、古墳を造ることができない無力な集団であったかといえば、それは先にあげた傑出した出土品の数々が否定することになる。

ところで、鳥羽山洞窟のような洞窟葬所の他にも、横穴墓、地下式横穴墓、箱式石棺墓、板石積石棺墓、土坑墓など古墳以外の墓制が認められるのもたしかである。その代表的なものに九州南部にみられる地下式横穴墓がある。

橋本達也氏と藤井大祐氏は地下式横穴墓について、宮崎県西都原 4 号地下式横穴墓や下北方 5 号地下式横穴墓に代表されるように複数領の甲冑や装身具など有力首長墓の副葬品としても傑出した内容を誇るものもあらわれることや地下式横穴墓は古墳墓制と排他的ではなく、共存しうるものであったことなどを指摘している（橋本・藤井 2007）。

このように地下式横穴墓も「古墳を造ることができない低い地位の集団」ではないことがわかる。

11 大和政権との関係

鳥羽山洞窟に葬られた集団は、前方後円墳体制からは外れた存在であった。しかしながら、大和政権と交渉であったかといえば、それも正しくはない。石釧については大和政権から「配布」されたのではなく、「交易」によるものとの見方が妥当であることは先述したとおりであるが、その交易も大和政権と無関係に行われていたものとも考え難い。

河村好光氏は、碧玉製品を生産する玉づくり集団に「独自の役割を認め、むしろその生産物を滞りなく行き渡るよう調整する機能」が、大和政権には求められていたと論じる（河村 2010）。伊藤雅文氏は、呪具として存在する腕輪形石製品は「古墳への埋葬時に必要な道具として首長が入手するもの」と考え、その祭式を共有することにこそ大和政権との親縁性を確認するものであり、その流通もまた掌握していたことを指摘している（伊藤 2008）。⁴⁾

私も小諸市野火附遺跡出土の石釧を検討する中で、野火附遺跡もその南端に位置するものと理解できる鋳物屋遺跡群の歴史的環境を考察したことがある（櫻井 2011）。本遺跡群は小諸市・佐久市・御代田町の三市町にまたがり、鋳物師屋遺跡（小諸市）、鋳師屋遺跡・前田遺跡（佐久市）、野火付遺跡・十二遺跡・根岸遺跡・前田遺跡（御代田町）の 7 遺跡から構成されるものであり、野火附遺跡や北に近接する宮ノ反 A 遺跡群も実質的には同一遺跡群に属するとみてよいだろう。遺跡



図 9 小諸市野火付附遺跡と鋳物屋遺跡群
（櫻井 2011 より）

群の主体は8・9世紀であり、357軒の竪穴住居跡と434棟の掘立柱建物跡が発見されている。宮ノ反A遺跡群からは長倉駅の駅倉とみられる官衙跡や東山道の側溝とみられる2本の溝跡が検出され、この一帯に東山道長倉駅や塩野牧・長倉牧の経営を担った集団の集落の可能性が高い(堤2012)。こうした鋳物屋遺跡群周辺であるが、野火附遺跡が出現する4世紀末～5世紀初頭までは集落が営まれなかった地域であった。野火附遺跡の石釧を出土した竪穴住居跡は4世紀末～5世紀初頭に位置付けられる。その後、5世紀中葉頃に御代田町前田遺跡において5軒の竪穴住居跡からなる小規模な遺跡があらわれるが、ここからは陶邑産のTK73～216型式にあたる初期須恵器のハソウや石製模造品が出土し、カマドも導入されている。私はこの段階での石製模造品は大和政権の深い関与のもとで流布されたものであると理解しており、この前田遺跡で5世紀中葉に出現する新来の文化を伴った集落は、大和政権の強いつながりのもとで形成されたと考えている。そして、在地勢力がそれほど及んでいない新開地ではあったが、一方では東山道以前の古東山道の推定ルートにあたる交通の要衝であったことが大和政権と関係の深い勢力が進出した最大の要因ではないかと推測したのである(櫻井2011)。

ただし、大和政権との関係が深いことが推測できる地域でありながら、鋳物屋遺跡群周辺を含む佐久地域には前方後円墳が築造されなかった。この地域も前方後円墳体制からは外れた位置にあったのである。さらにいえば、前方後円墳はもとより鋳物屋遺跡群周辺では前中期古墳の存在も認められないのである。

交通の要衝に位置するという立地は、鳥羽山洞窟にも通じる。そして前方後円墳体制から外れた存在という点でも共通している。しかしながら、鳥羽山洞窟や岩谷堂洞窟を含む依田窪地域でも大和政権と深い関係があったことは、先に触れた社軍神遺跡での石製品の流通のありかたからもうかがえよう。

前方後円墳体制が、政治的統合や社会秩序の一側面をあらわしていることはたしかであるが、橋本氏と藤井氏が述べるように、「近畿中央政権の政治的影響力は九州南部から東北中部までを一元的、面的に列島を掌握するようなものではなく、地域ごとにその影響力の受容の要否強弱はさまざまだと考えられる。九州においても九州全体あるいは九州北部・南部といった枠

組みでの共通性はなく、各首長層の連合体制と首長による間接支配、王権の小地域直接支配、なかには、威信財や必需物資の交易圏には同調しても、政治的秩序には参入しないというあり方もこの時代の社会にはあり得たのである」、「前方後円墳築造域は文化的共通圏や民族意識が形成される面的な領域として存在するのではなく、点の集合体として広域化しつつある段階を示している」という理解が的を射たものであろう(橋本・藤井2007)。

門脇禎二氏は前方後円墳体制論を批判し、「前方後円墳という葬制のひろがりとは、一つの文化の共通性のひろがりとして、民族形成・進展の指標となるもので、直接に国家の権力的統一の進展を示すものではない」と指摘している(門脇2008)。私は、門脇氏がいう「文化の共通性」という理解は妥当ではなく、やはり政治的な統合の枠組みとしてとらえるべきであると考えている。ただし、それはあくまでも政治的統合の一側面をあらわすものであったのである。

なお、これまで「大和政権」とひとくくりに論じてきたが、「5世紀後半・末以前の大和政権は、まだ王権が微弱で、大王と畿内および各地域の首長たちとの連合政権的な段階にとどまっていた」との加藤謙吉氏の指摘のとおり(加藤2002)、各地域における大和政権の影響力は中央豪族との個別の関係等にも大きく作用されると私は考えており、この観点からの検討も必要であるだろう。同時に他の在地勢力との関係という観点も重要になる。

12 おわりに

本稿では、洞窟葬所という全国的にも珍しい葬法を有する鳥羽山洞窟について私見を述べてきた。これまでみてきたように、鳥羽山洞窟に葬られた集団は「古墳を築くことができなかつた力のない集団」などではなく、「政治的には前方後円墳体制の枠組みから外れてはいたが、交易を通じて蓄えた経済力のある集団」といった像が浮かび上がってくる。キーワードは「交易」である。

ところで、海蝕洞窟との類似性や依田窪地域の歴史的環境を踏まえれば、「海人集団」がクローズアップされてくる。後藤明氏は、「古墳時代は各地で政治的統合が進む中、海の生業を専門として首長制の中に独自の位置を占める集団、海人族の出現が見られる」と

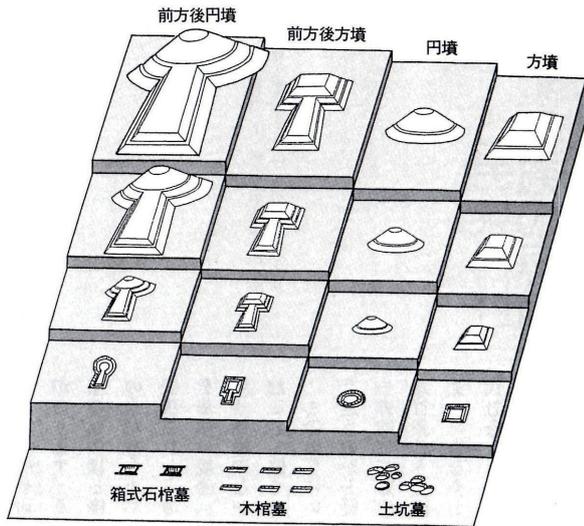


図10 前方後円墳体制にみる古墳の階層
(都出 1998 より)

指摘し、先に触れた海蝕洞窟を葬所とする集団を「海人」としてとらえる。そして、「古墳時代の海人は、進む政治的統合の中で特殊な技術を持った専門集団として生き残りをかけていた。」とする。その技術の中には交易や種々の工芸、水運、軍事、造船や航海技術、さらには海の安全を司る宗教的な技術もあったと論じている(後藤 2010)。

出雲、そして越とのつながりの痕跡がみられることは先に述べたとおりである。私も鳥羽山洞窟と岩谷堂洞窟に葬られた集団を「海人」と関係するものとみる意見に大きな魅力を感じる。しかしながら、海人であっても前方後円墳を築造する集団もあったわけであり(門脇 2008。関・永峯 2000)、洞窟葬所=海人集団と直結することは難しい。田中元浩氏は、磯間岩陰遺跡を分析する中で、岩陰・洞窟遺跡の被葬者を「海人論」で説明するには根拠が少ないことを指摘する(田中元 2008)。ただし、依田窪地域の歴史的特徴からすれば、農耕社会からは一線を画した「交易を主とした集団」の葬所であることは間違いない。そしてその交易集団が、海人の流れをくむものも含まれる可能性は十分あるだろう。また大和政権下における中央豪族及び在地勢力との関係や影響といった観点も重視しなければならないことは先に述べたとおりである。

また、「曝葬」などの特徴的な人骨出土状況のありかたは、殯との関係の中で考えていくべきであることを指摘した。古代日本における葬送儀礼の基本は殯であり、それは古墳への埋葬の有無とは関係がない一般

的なものということがわかる。そして、古墳への埋葬は当該期の主流を占める葬法ではあるものの、殯が行われた後の遺骸処理のひとつにすぎず、埋葬しない葬法も少なくないことを、そして、「前方後円墳体制」は古墳時代の極めて重要な政治的統合の象徴であるが、それはあくまでも一側面であることを、鳥羽山洞窟は物語っているのである。

このように鳥羽山洞窟は、古墳時代の墓制を考える上で欠かすことのできない重要な遺跡である。ある意味、古墳時代研究の鍵を握る遺跡といってもよいだろう。

本稿をきっかけとして、今後も鳥羽山洞窟についての研究をさらに進めていきたいと思う次第である。

謝辞

本稿を草するにあたっては、信濃国分寺資料館長の尾見智志氏、千曲市教育委員会の平林大樹氏のご教示をいただいた。記して感謝申し上げたい。

註

- 1) 平成 24 年 9 月 23 日には「洞窟に葬られた集団のナゾ～丸子・鳥羽山の古代洞窟葬所～」、平成 28 年 10 月 16 日には「古墳時代の鳥羽山洞窟」と題した講座を担当させていただいた。平成 24 年の講座については、展示図録『権力者と富裕者の幽世』に講座要旨を掲載している(櫻井 2012)。
- 2) これについては、「靈魂封じ込めの場としての古墳」と題した論文を『信濃』へ投稿中である。ここで私は、古墳にはその政治的な位置づけの他にも「靈魂封じ込め」という機能が大きな役割を果たしていたことを論じている。
- 3) このうち「余戸郷」は高山寺本のみに記載されており、流布本では 7 郷となっている。
- 4) 河村氏と伊藤氏は「倭政権」との表記をしている。

引用参考文献

- 伊藤雅文 2008 『古墳時代の王権と地域社会』 学生社
上田市誌編さん委員会 2000 『上田市誌 歴史編 (3)』
尾見智志 2015 「鳥羽山洞窟出土の柿経について」『千曲 158 号』 東信史学会
岡本雅亨 2016 『出雲を原郷とする人たち』 藤原書店
堅田直 1993 『古墳』 光文社
加藤謙吉 2002 『大和の豪族と渡来人』 吉川弘文館
門脇禎二 2008 『邪馬台国と地域王国』 吉川弘文館

- 蒲原宏行 1987 「石釧研究序説」 増田精一編 『比較考古学
試論』 雄山閣
- 河村好光 2010 『倭の玉器』 青木書店
- 後藤明 2010 『海から見た日本人—海人から読む日本の歴
史—』 講談社
- 小林行雄 1961 『古墳時代の研究』 青木書店
- 五来重 1994 『日本人の死生観』 角川書店
- 五来重 2008 『山の宗教』 角川ソフィア文庫
- 小山真夫 1927 「信濃國武石村出土の巴形銅器」 『考古学雑
誌』 17 - 4
- 小山真夫 1932 「信濃国小県郡の岩窟古墳」 『考古学雑誌』
22 - 2
- 櫻井秀雄 2011 「住居跡から出土した石釧をめぐり—考察—
『考古学と陶磁史学—佐々木達夫先生退職記念論文集—
金沢大学考古学研究室
- 櫻井秀雄 2012 「洞窟に葬られた集団のナゾ」 『平成 24 年
度特別展 権力者と富裕者の幽世—上田市域の古墳総
まくり—』 上田市立信濃国分寺資料館
- 塩入秀敏 1982 「社軍神遺跡」 『長野県史考古資料編 主要
遺跡（北・東信）』 長野県史刊行会
- 設楽博己 2008 『弥生再葬墓と社会』 塙書房
- 杉山秀宏 2015 「鉄鏃に伴う鹿角製装具及び鳴鏑について」
『研究紀要 33』 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 関孝一 1994 「鳥羽山洞窟遺跡」 『信州の大遺跡』 郷土出版
社
- 関孝一・永峯光一 2000 『鳥羽山洞窟—古墳時代葬所の素
描と研究—』 信毎書籍出版センター
- 藪田香融 「古代海上交通と紀伊の水軍」 『古代の日本 5 近畿』
角川書店 1970
- 高橋幸治 2003 「集落出土の腕輪形石製品—大和を中心に
—」 大塚初重先生喜寿記念論文集 『新世紀の考古学』
- 武石村誌刊行会 1989 『武石村誌 第 2 篇』
- 田尻義了・岩永省三 2009 『奴国の南』 九州大学総合博物
館
- 辰巳和弘 1996 『「黄泉国」の考古学』 講談社現代新書
- 田中元浩 2008 「磯間岩陰遺跡の再検討」 『岩陰と古墳—海
辺に葬られた人微地—発表要旨集』 財団法人和歌山県
文化財センター
- 田中良之 2008 『骨が語る古代の家族』 吉川弘文館
- 田中良之 2012 「墓地に残された人骨から復元する葬送儀
礼」 土生田純之編著 『事典 墓の考古学』 吉川弘文館
- 都出比呂志 1998 『NHK 人間大学 古代国家の胎動』 日本放
送出版協会
- 都出比呂志 2011 『古代国家はいつ成立したか』 岩波新書
- 永峯光一 1982 「鳥羽山洞窟遺跡」 『長野県史考古資料編
主要遺跡（北・東信）』 長野県史刊行会
- 西山克己 2013 『シナノにおける古墳時代社会の発展から
律令期への展望』 雄山閣
- 橋本達也・藤井大祐 2007 『古墳以外の墓制による古墳時
代墓制の研究』 鹿児島大学総合研究博物館
- 藤田富士夫 1990 『古代の日本海文化』 中公新書
- 穂積裕昌 2012 『古墳時代の喪葬と祭祀』 雄山閣
- 丸子町誌編纂委員会 1992 『丸子町誌 歴史編上』
- 光江 章 2014 「千葉県香取出土の二重ハソウ—大場磐雄
著『楽石雑筆』より—」 『國學院雑誌 第一一五巻第
一号』 國學院大學
- 村井康彦 2013 『出雲と大和』 岩波新書
- 若狭徹 2013 『ビジュアル版 古墳時代ガイドブック』 新
泉社
- 和田萃 1995 「殯の基礎的考察」 『日本古代の儀礼と祭祀・
信仰』 塙書房
- 和田萃 2005 「古代の殯」 『民俗小事典 死と葬送』 吉川弘
文館
- 史料の引用等は以下の文献によった。
『魏志倭人伝』 『隋書倭国伝』 石原道博編訳、岩波文庫
『日本書紀』 日本古典文学大系、岩波書店
『延喜式』 新訂国史大系、吉川弘文館
『和名類聚抄』 諸本集成和名類聚抄、京都大学文学部国語
国文学研究室編、臨川書店
『古事記』 日本思想体系、岩波書店